

総合学習「クリスマス会」の実践

古田陽子

1. 個が生きる総合学習の構成と評価

本学級では、教科・領域に分けることができない指導内容の学習を「総合学習」として構成している。(総合学習のねらいと内容については初等教育53号参照)

(1) 学習活動の構成

本学級には低学年組、中学年組、高学年組の3クラスがあり、総合学習においてはその3クラス合同で学習を行うことが多い。1年生から6年生の児童までという大きな集団の学習では、学年による経験の差を生かした学習が構成できたり、児童同志のかかわりもひろがるといった利点がある。しかし、個人差の大きい集団となるので、個々の児童のねらいが明確にされ、そのねらいに迫っていくための学習活動を指導者がしっかり捉えていないと、個が生きる学習とはなりにくい。

学習活動を構成する際には、個別理解(障害の実態、発達段階、興味・関心、生活経験、対人関係等)に基づき個に応じた活動を用意するとともに、各クラスの実態(集団活動、日頃の学習内容等)も考慮する必要がある。個々の児童が生き生きと学習に取り組み、「できた」「やった」という充実感、満足感を味わうように、個の実態やクラスの実態に応じて、学習活動の量や内容を変えていくことも考える。

(2) 評価

総合学習が毎年の単なる経験の繰り返しとならないように、単元における評価の観点を明らかにする。また、単元の指導後の評価を個々の児童の生活や学習の課題として捉え、日常の生活や学習において指導を続けていく。その結果が、次年度の同単元の学習で現れてくると考える。総合学習では6年間を通して児童の成長をみるというように、長期的な視野にたって評価していくことも必要であろう。

2. 実践事例「クリスマス会」

(1) 単元について

毎年12月が近づくと、児童から「今年の劇何するん?」、「サンタクロースくるかね」という声が聞こえてくる。恒例行事として12月初旬に行っているクリスマス会を、児童はとても楽しみにしている。本学級のクリスマス会は季節行事であるとともに、児童の学習を発表する場としてもとらえている。クリスマス会当日は、保護者や教育実習生、他学級の児童の前で、劇や音楽の発表を行う。

本単元の学習活動には、発表に向けての練習や、クリスマス会を盛り上げるための飾りや小道具作り、高学年児童による司会やゲームの進行の準備等を考えている。それらの学習を通して、友だちと一つのことを作りあげる喜びや、表現する楽しさを味わせ、児童の生活をより豊かなものにしていきたい。

(2) 児童の実態

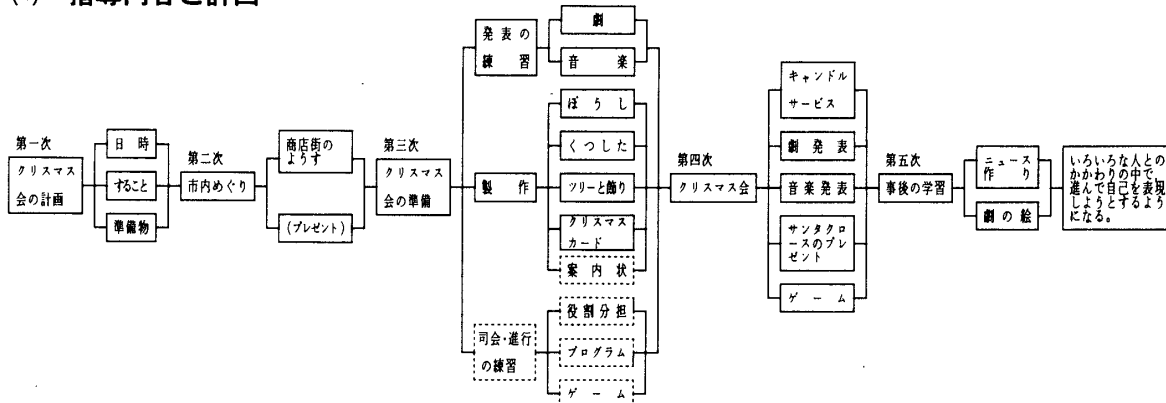
本単元においては、児童の実態を表現に関するもの(意欲、技能)、集団活動に関するもの(参加、協力)という二つの観点で捉えていく。

児童の実態としては、過去のクリスマス会の経験を生かして、見通しを持って活動に取り組める児童から、クリスマス会は今年初めてという1年生の児童まで、様々である。

(3) 指導目標

- ① クリスマス会の学習活動を通して、表現意欲を高め、様々な人間関係の中で表現しようとする態度を養う。
- ② クリスマス会をみんなで作りあげることにより、集団活動に進んで参加する態度や、協力する態度を養う。

(4) 指導内容と計画



([] は高学年組のみが学習する内容)

(5) 学習活動の構成

本単元における学習活動をまとめたものが〈表1〉である。指導内容を考えて、個々の児童のねらいが達成し易いように、各組ごとで学習する活動も多く組み入れている。

それぞれの学習活動では、これまでの経験や学習が活かされるように考えている。例えばぼうしづくりという指導内容において、低・中学年組ではボール紙でぼうしを製作するが、高学年組は生活科で学習している縫いものの経験を生かして布で作製する。また、低学年組のクリスマスカードには図工で学習したスタンプの技法を取り入れる等、児童の活動が充実したものとなるようにした。

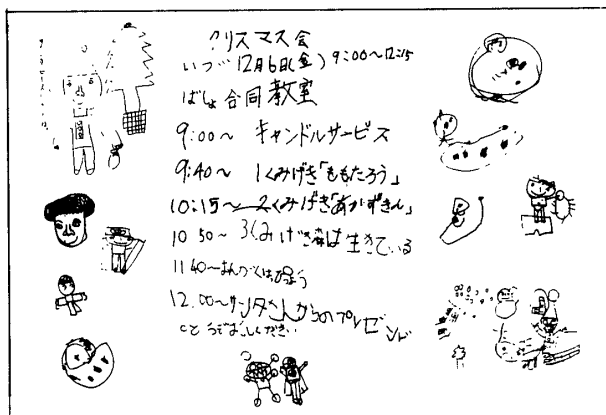
〈表1〉単元「クリスマス会」における学習活動

指導の内容	学 習 活 動	時数	指導形態
クリスマス会の計画	○昨年のクリスマス会のVTRを見て、思い出したことなどを発表する。 ○今年のクリスマス会について、することや準備するもの等を話し合う。	1	合同
劇発表	○劇の発表に向けて、物語の学習や劇化の学習を行う。 本年度…低学年組は「ももたろう」、中学年組は「赤ずきん」、高学年組は「森は生きている」を発表	約15	各組
音楽発表	○歌唱や、踊り、器楽演奏の発表の練習をする。 本年度…歌と踊りは「うさぎ野原のクリスマス」 器楽演奏は鍵盤ハーモニカの演奏。低学年組は「走れ救急車」、 中学年組は「キラキラ星」、高学年組は「ドレミの歌」を演奏	2 4	各組 合同
市内めぐり (校外学習)	○商店街やデパートのクリスマスの飾りつけを見る。 ○自分の物とペア※の友達へのプレゼントを買う。	4	合同
ぼうし作り	○音楽発表の時にかぶる帽子を作る。	4	各組
くつした作り	○サンタクロースのプレゼントを入れてもらうくつ下を作る。		
クリスマスカード作り	○保護者と交換するカードを作る。		
ツリー作り	○クリスマスツリーとその飾りをつくる。	2	合同
案内状作り	○クリスマス会の案内状を作って、簡易多色印刷機で印刷し、校内の先生方や保護者、教育実習生に配布する。	2	高学年組
司会、進行	○司会やゲームの進行係の役割分担を話し合い、練習する。 ○プログラムを書いたり、ゲームの準備をする。	3	高学年組
クリスマス会をふりかえって	○クリスマス会のVTRや写真をもとに、したことをふりかえってニュース作りをする。 ○劇の絵を描く。(想画大会関連)	3	各組

※本学級では年度頭初に児童同志のペアを決め、いろいろな学習において活用している。

クリスマス会の案内状は、伝える相手や伝えたい事項がこれまでの経験からよくわかっている高学年組児童が、毎年製作している。また、高学年児童の特性であるリーダー性も発揮できるように、司会や、発表の合い間のゲームの進行も、高学年児童に行わせた。

学習活動においては、児童の実態に合わせて活動の量を変えていくことも考えている。例えば、くつした作りのくつしたの飾りについて、あらかじめ用意された飾りを貼るだけの児童、飾りを切って貼る児童、飾りを描いてから切って貼る児童というように、どの児童もくつしたづくりに進んで取り組み、「できた」という満足感が得られるように配慮した。



〈図1〉 児童が作った案内状

(6) クリスマス会当日

当日は本学級の多目的教室に舞台を設置した。(会場設営については本校研究紀要昭和61年度参照) 保護者や、教育実習生、本校の2年生と複式低学年組の児童、及び本校教員を招待して行われた。劇や音楽の発表の合間には、ゲームも行われ、観客と本学級の児童が一体となって楽しめる会であった。会の終わりには、副校長が扮するサンタクロースが登場し、児童はひとりひとり、プレゼントが入ったくつしたをもらった。



〈写真1〉 サンタクロースからのプレゼント

午後からは児童が用意したお菓子(本年度は寒天ゼリーとラスク)と紅茶で、保護者、教育実習生との茶話会が開かれる。児童同志のプレゼント交換、保護者と児童とのクリスマスカード交換を行った。

(7) 評価

ひとつひとつの学習活動では、それぞれの観点を持って、評価を行う。単元全体の評価は、児童の実態で述べた、表現に関するもの(意欲、技能)、集団に関するもの(参加、協力)という二つの観点で行う。

児童にとっては、クリスマス会当日が単元を通して学習してきたことへの評価の場となる。観客席からの大きな拍手、「上手にできたね」等の保護者からの賞賛のことばに、どの児童も満足そうな表情をしていた。

3. 劇の発表—低学年組の実践—

劇の発表は、単元の中で最も多くの時間をかけて取り組む学習活動であり、児童がとても楽しみにしている活動でもある。劇の発表について低学年組における実践を報告する。

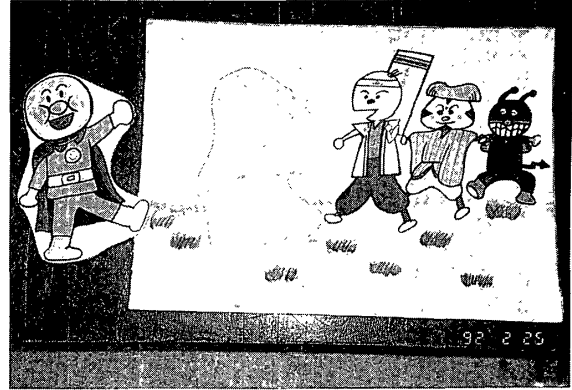
(1) 劇づくりでねらうもの

劇をつくり、発表する過程において、児童は楽しい雰囲気の中で、ことばや動作で表現することを学んでいく。表現することが楽しいという思いが、表現意欲の育成へとつながっていくと考える。劇はコミュニケーションで成り立つものである。演出者である指導者と児童とのコミュニケーション、演じる児童相互のコミュニケーション、演じる児童と観客とのコミュニケーション、それらのコミュニケーションが劇づくりによって促進される。

また、みんなで一つの劇をつくりあげることで、集団の中で自分の役割や仕事を意識して行動する力を養うことができると考えている。

② 物語の学習

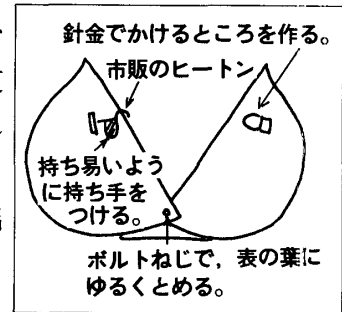
劇化の前に物語の登場人物や筋を理解していく学習を物語の学習と称している。今回は、自作の紙しばいを使用して学習を進めていった。型はめが好きな児②と児③が学習に参加し易いように、この紙しばいは登場人物が型はめになっている。次に誰が出てくるかを、型にはめることによって、児童自身が評価できるようにした。登場人物が取りはずせて動かせるので、児童には好評であったが、ダンボール紙で作成したために、一枚一枚の厚みが増して、紙しばいとしては扱いにくいという難点もみられた。



〈写真2〉紙しばい

③ 劇化の学習

自分の役に合わせて演技したり、台詞を言ったりする学習を「劇化の学習」と称している。劇化の学習では、児童が楽しく演技できるようにはどのような手だてを講じれば良いかを常に考えている。そのためには、児童の実態に合わせた台詞や動作を用意するのはいうまでもないが、劇を盛りあげるための小道具も大切な役割を果たしていく。ももたろうの話のおもしろさの一つとして、ももの中からももたろうが出てくるというものがある。今回は「もも」を右図のように工夫してみた。タイミングよくももが割れてとび出せると、演じている児童も観客をおどろかす楽しさがある。



児童は好きな小道具を持つと、演技に意欲的になることがよくある。児①には、好きな刀と旗を持たせた。児②の演技には、演技が持続できるように児②が得意としている自転車乗りを取り入れた。また、「おだんごちょうだい」という台詞と演技をひき出すために、本物の団子を使用した。

〈図5〉「もも」を裏側から見たところ

脚本ができあがった時点で、台詞や効果音楽を入れた演技用テープを作成し、各児童に持たせた。繰り返しテープを聞くことで、台詞や演技のタイミングをつかんでいくことができた。

④ 評価

劇づくりの課題に対する評価として、当日の演技の様子を記述したものが〈表3〉である。

〈表3〉当日の演技の様子

表現意欲、集団活動への参加態度は、引き続き、日々の生活や学習の中で評価していく。自分たちで役割を決めて「ももたろうごっこ」をする児童の姿に、表現する喜びや、友だちと一緒に活動する楽しさを味わっているのを見ることができた。

児①	オムスビマンの踊りの動作が練習時よりも増え、自分で工夫して踊っていた。演技の内容や流れをよくつかんで演技することができた。
児②	自転車に乗って登場すると、みんなから歓声があがった。「おだんごちょうだい」とはっきりと言い、手をさし出す動作もできた。
児③	児⑤と台詞のやりとりができた。鬼の踊りは踊っていたが、練習時のような笑顔が一度もみられなかった。スポットライトがまぶしかったようだ。
児④	相手の動作に合わせてながら、タイミングを見計らって台詞を言ったり、動作をしたりすることができた。
児⑤	おじさんと鬼の役をアドリブの演技も加えながら生き生きと演技することができた。
児⑥	おばあさんとバイキンマンの二役を見事にこなした。台詞もはっきり言え、踊りも楽しそうに踊っていた。

⑤ 事後の学習

クリスマス会後に、劇のビデオを見せると、ビデオに合わせて台詞を言ったり、動作をしたりしていた。何度でも見たがる児童の様子から、劇づくりが楽しかったことが伺われる。

写真を見ながらのニュースづくりでも、自分の役のことを中心に、演技したことがいろいろできた。

4. 考察

(1) 学習活動の構成について

クリスマス会の計画では、昨年のクリスマス会のことを思い出しながら、準備する物やクリスマス会までにする事を発表できる児童が多かった。ほとんどの児童が昨年発表した劇の題名に限らず、役割や台詞までもよく覚えていた。そして「今年はどんな劇をするのだろうか」と期待していた。毎年同じ学習活動を構成することで、児童に学習の見通しを持たせることができたといえよう。

児童によって、あるいはクラスによって学習活動の量や内容を変えたことで、より児童の実態に合った学習活動となり、日頃の生活や学習での経験を生かせるものとなった。例えば高学年組の児童は、宿泊学習でのレクリエーション係としての経験や、いろいろな行事の司会の経験を生かして、見事にクリスマス会の司会とゲームの進行をこなした。個人差の大きい集団であればあるほど、個が生きる総合学習となるためには、児童の生活や学習の経験を踏まえて、多岐にわたる学習活動を用意する必要がある。

(2) 表現意欲について

単元「クリスマス会」における自己表現には、いろいろな表現方法が含まれているが、ここでは劇の学習に関する表現意欲について、児童の様子から考察する。

クリスマス会の劇は、クリスマス会が終わってもいつまでも児童の心の中に残っている。児童の中には、家に持って帰った演技用テープを次の劇に取りかかるまで、毎日のように聞いている児童もいる。本年度の低学年組でも、年が変わっても給食時に「ももたろう」のテープを聞いている。そしていつのまにか劇あそびが始まる。生活の中で遊びとして劇が発展していく様子から、劇の学習は表現意欲を高めるのに適しているといえよう。ただし、表現意欲を高めることができる劇は、児童にとって表現した充実感や満足感が味わえるものであり、児童が演じるのが楽しいと思うような劇である。クリスマス会で劇をしたことが楽しかったという思いが、3学期の学芸会の劇、来年のクリスマス会の劇をつくる意欲へとつながっている。

児童に表現したことの充実感や満足感を味わわせるためには、表現を披露し、認めてもらう場を指導者が設定することも重要である。観客の拍手や声援が、練習時にはみられなかった演技を引き出すことが多々ある。

(3) 人とのかかわりについて

市内めぐりでのお店の人とのかかわり、プレゼント交換でのペアの人とのかかわり、演じる人と観る人とのかかわり等、単元「クリスマス会」では、様々な形で人とのかかわりを考えている。

特に劇の学習では、児④のように友だちとのかかわりが苦手な児童にも、意図的にかかわりの場を設定できる。児④は、「ももたろう」の劇で、友だちの演技に合わせた演技をすることができた。3学期の学芸会でも、友だちとかかわらなくてはならない役にしたところ、友だちの演技を気にしながら、友だちをリードして演技することができた。学級内でも、友だちへの発言が積極的になり、自分からかかわりを持つとすることも増えてきた。

また、劇はいろいろな役の人が集まって成り立つものであるから、役割意識もできてくる。演技用テープを聞きながら、「次は〇〇ちゃんの（言う）番よ」とか、「これ、みんなで踊るんよ」と、会話も弾み、仲間意識も育ってきている。

(4) 単元「クリスマス会」の評価について

本年度の単元の学習において主体的な活動ができたかどうかは、指導中や指導後の評価だけでなく、来年度の「クリスマス会」で、どれだけ見通しを持って活動できるかにも現れる。総合学習の評価は前述したように、長期的な視野にたって行う必要がある。